占場（うらないば）の歴史

十和田神社は東北地方で広く信仰される龍神信仰の象徴です。地元の言い伝えによると、熊野三山の修行僧であった南祖坊（なんそのぼう）が、十和田湖の守り神である龍女を脅かす八頭の大蛇と戦いました。七日七夜の戦いの末、ついに南祖坊が勝利し、龍女とともに湖の守り神になったと言われています。

ここから 150 メートルほど山を登ると、平地に鉄の梯子が設置されています。梯子を下りると占場と呼ばれる場所にたどり着きます。ここで南祖坊が初めて入水したと言われており、米を白紙にひねったものや、宮司が祈念をこらした「おより紙」を湖に投げ入れ、神様に祈りを捧げることができます。紙が沈むと願いが叶い、紙が浮くと叶わないそうです。重い物を包んでズルをしようとしても、波に運び去られてしまうと言います。

現在、占場へ下る梯子は使用できませんので、ご注意ください。